

高松支部国語部会

高松・山田中 渡瀬 健太

1 研究主題

(1) 研究主題

生きて働く力を育む国語教室～言葉による見方・考え方を働かせ、深まる学び～

(2) 研究主題設定の意図

令和の日本型教育の中で、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」ということが挙げられている。「個別最適な学び」は「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。

教師が生徒に発問や指示を行い、それを受けて生徒が考えるという受け身の授業から脱却し、生徒が、国語科における付けたい力を明確に意識し、自らの学びを舵取りしながら、それぞれに合った学習を展開していけるような教師の働きかけが、これから求められる教師像の一つであると思い、研究主題を設定した。

2 研究授業

(1) 研究の柱

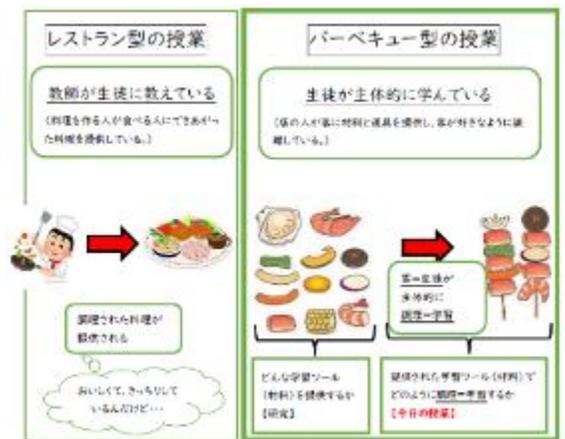
UDL (学びのユニバーサルデザイン) を通して、どの生徒も、自らの学びを舵取りしながら目標を達成できるような授業が構成されているか。

(2) 研究授業の目的

現行の学習指導要領では「個別最適な学び」が重視されている。また、一方で集団の中での個を尊重する「協働的な学び」の実現も求められている。さらに、「主体的に学習に取り組む態度」の評価のあり方についても問われている。「何をどのように学ん

だか」「何ができるようになったのか(何ができなかったのか)」などを振り返ったり、学びに対して自己調整を図ったりすることができているかという観点で評価しなければならない。

これらを実現するためには、教師がいくつかの学習ツール(材料)を準備する必要がある。しかしそれらを用いて一方的に教えてしまっては意味がない。学習ツール(材料)を子どもたちに提供し、子どもたちがそれをうまく活用できる学習環境作りを進めていきたい。



(3) 研究授業の具体

① 題材名

「訓読・書き下しにチャレンジ」

② 目標

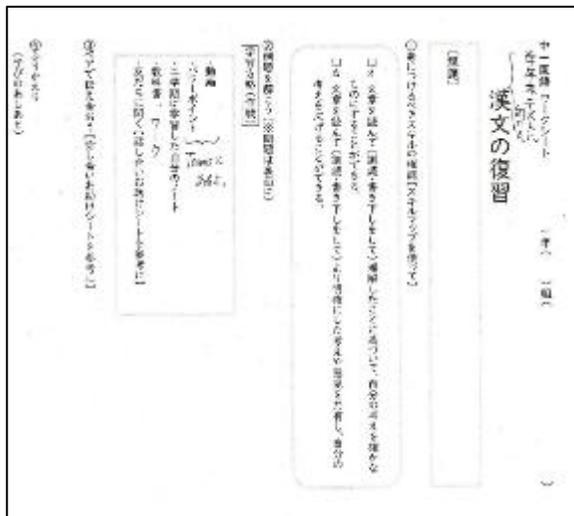
音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむ。

「訓読の仕方」とは、返り点や送り仮名など漢文の訓読に必要な基礎的な事項をいう。「音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方」とは、基本的には、教材を音読する際に、教材に即して文語のきまりや訓読の仕方を学習することを示している。

③ 本時の活動の流れ

	学習内容・活動	学習方略 【評価】
導入	学習課題の確認 『読読・書き下しにチャレンジしよう』 (1) 読め方の確認 本時の学習の進め方や身につけるべきスキルを確認する。 ★「読むこと」に関するスキルマップ①を用いる	
法説 ①	(2) 例題を確認し、学習方略を選択する。 ① 例題①(読読)の読解(読むこと) 基本問題: ○ ₁ ○ ₂ ○ ₃ ○ ₄ ○ ₅ 発展問題: ○ ₁ ○ ₂ ○ ₃ ○ ₄ ○ ₅ ○ ₆ ○ ₇ 例題②(書き下し) 基本問題: 読みかたの練習 発展問題: 読みかたの練習 (3) 自分が慣れた学習方法をもとに、例題を解く。→個別最適な学び	OICTの活用 ・動画 ・パワーポイント ○2学期に学習した自分のノート・教科書を参考にする。 ○友だちに聞く (聞き方・質問の仕方を参考)→協働的な学び
法説 ②	(4) 自分の考え(考え-主張)をペアで確認する。→協働的な学び ★なぜそのような答えになったのか理由も示しながら。	【知】正しく読読・書き下し ができたか。(ノート)
法説 ③	ふりかえり これまで使用している「ふりかえりシート」を用いて、「学びのあしあと」を作成。 (※本冊子に、添付資料としてこれまでの「学びのあしあと」を載せています。)	【主】自分で学習方法を選択し、学びのふりかえりができたか(学びのあしあと)

④ 授業のワークシート等



⑤ 参観時の視点

参観者が生徒の困り度や授業におけるバリアに気付けるに、以下のプリントを配布した。



⑥ 参観者の感想

- 様々な方略から正解を求める手法が用意されており、すばらしかった。
- 生徒が自主的に取り組んでいるように感じた。
- 「話し合い」のお助けシートを活用できていた。
- 動画、パワーポイントは、自分で何度も確認できるからいい。
- 動画を見ても分からない生徒や周りに聞いても理解できていない生徒はどうするのか。また、誤ったまま教え合っていたチームもあった。

(授業で読み合う、教え合う様子)

